

《翻 訳》

ニューヨーク知識人の隆盛
— 『パーティザン・レビュー』誌とそのグループ—
テリー・A・クーニィ 著
大 西 哲 訳

The Rise of the New York Intellectuals: Partisan Review and Its Circle
Terry A. Cooney
translated by SATORU OHNISHI

キーワード

ニューヨーク知識人 (New York Intellectuals), 『パーティザン・レビュー』誌 (*Partisan Review*), コスモポリタニズム (Cosmopolitanism), ラディカリズム (Radicalism), 共産主義 (Communism), ユダヤ系移民 (Jewish immigrants), アメリカ文学 (American Literature)

序 章

思想の動向を近年回顧したものによると、『パーティザン・レビュー』誌は第二次世界大戦頃の「アメリカのリトル・マガジンの中で、確かに最も影響力のある雑誌」であり、しかも「恐らくは、これまでで最も影響力のあるリトル・マガジン」⁽¹⁾であると評されている。こうした判断は、1930年代後半から1950年代半ばにかけて、アメリカ人の知的生活において『パーティザン・レビュー』誌が重要な役割を果たしていたという広く受け入れられている評価を、恐らくはあまりにも強調しすぎた形で伝えるものである。この雑誌が重要であるという意識は、多くの要因に基づいている。すなわち雑誌それ自体の内容、政治と文化にわたる掲載範囲、雑誌の歴史によって象徴される経験のパターン、『パーティザン・レビュー』誌に関係した人々のいくつかの学問分野における重要性、学者や評論家の間にあった知識人を問題にしたいという欲望、また長年、敵からも味方からも向けられてきた注目の度合い、などである。本研究は、この雑誌に対する持続的な関心だが、その歴史的な重要性を不当に拡大せずとも

正しいのだとする思考様式を論じるものである。

『パーティザン・レビュー』誌は、やがてニューヨーク知識人として知られるようになる、あの才能あふれる男女のグループに、最初の、そして最も重要な活動の拠点を提供した。知識人グループの範囲を限定することは、厳密には難しいことである。どんな会員名簿や支部のリストを作るにせよ、公式の関係だけでなく、非公式の関係にも依拠せねばならず、また公に表明された意見だけでなく、共有された前提という証拠にも依拠せねばならない⁽²⁾。それにもかかわらず、このグループの末端は曖昧であるかもしれないが、このグループの存在はしばしば目に見えるほど明白である。この研究を行うにあたり、やがて「ニューヨーク知識人」となる人々のリストを、雑誌の創設から指導に尽力した『パーティザン・レビュー』誌の二人の編集者、フィリップ・ラーヴとウィリアム・フィリップスとで始めても差し支えないであろう。1937年に編集委員会に加わった他の三名（ドワイト・マクドナルド、F・W・デュピー、メアリー・マッカーシー）も、この雑誌に係った程度やその期間が大きく異なっているが、同様に数に入れてもまず間違いないだろう

う。1930年代の後半から1940年代の初めに、『パーティザン・レビュー』誌を中心に援助や相互交流を行ったグループには、ライオネル・トリリング、シドニー・フック、ハロルド・ローゼンバーグ、ライオネル・アベル、ジェームズ・バーナム、メイヤー・シャピロ、クレメント・グリーンバーグ、そしてデルモア・シュワルツなどがいた。(グリーンバーグとシュワルツは、一時期この雑誌の編集者を勤め、また他の人々のうち少なくとも三人か四人は、編集委員会の地位にふさわしい人物と考えられたり、ある時点では、その地位を提供されたりしたのである。) 1930年代に、この雑誌や編集者たちと親密な関係にあったジェームズ・T・ファレルは、後年この雑誌から離れていった。1940年代の初め、ダイアナ・トリリング、ポール・グッドマン、そしてアルフレッド・ケイジンは、全員がこの雑誌の仕事をしていたが、それぞれがある距離を保っていた——もしくは距離を取らされていた。もっと若い文筆家のグループも舞台に登場し始めていた。アーヴィング・ハウとダニエル・ベル、アイザック・ローゼンフェルドとソール・ベロー、彼ら全員が1945年以前に登場したが、彼らの主要な寄稿作品、また彼らと同年輩の他の人々の主要な寄稿作品は、主としてその後に書かれることになった。

『パーティザン・レビュー』誌の苦難に耐えた歴史を記す一冊の本がある。ジェームズ・B・ギルバートの『文筆家とパーティザン』(Writers and Partisans)で、これは率直な分析であり、今後とも役に立つ情報源として残るであろう⁽³⁾。本書は、これから論じる幾つかの解釈に関わるテーマに重点を置いているので、ギルバートの調査やその他の部分的な、あるいは未公表の研究とは異なるものになるであろう。現時点で注意すべき恐らく最も適切なことは、『文筆家とパーティザン』以降、批評的な研究や歴史に関する研究が、数多くの回想録や追想録にあらかた埋め尽くされており、過去のきわめて個人的な見方に注意を払うように要

求している点である。こうした記述の中には、著者たちが何とか昔の敵より長く生き延びて、積もる恨みを晴らしたり、得点を稼いだりすることに、かなりのエネルギーを割いてきたものもある。また中には、全く偏向したやり方で、現在の政治路線をたどろうとした記述もある。いずれにせよ多くの記述が、反省と同時に自己の正当化にも関心を抱いてきた。とはいえ、ときに本物の活力、知的な真剣さ、そして参加者だけが入手できる一種の洞察力を獲得してきた幾つかの記述もある⁽⁴⁾。歴史家は、かなりの注意を払ってという条件付きではあるが、こうした資料を全て何らかの形で活用することができる。本書での企画は、研究対象となっている時期から得られた証拠が一般的には思い出よりも重視に値し、また時として煩雑な言い方で表明される発達過程にある見解の方が、後から考えてきっちりと再構成された見解よりも、より多くのことを明らかにするという仮定のもとで進行する。

ニューヨーク知識人といえば、恐らく最も一般的には第二次世界大戦後の時期と結びついていて、リチャード・ホフスタッターが主張してきたように、その時期に『パーティザン・レビュー』誌は「アメリカの知的共同体の中で一種の社内報として」機能した⁽⁵⁾。戦後10年間に前面に出てきた争点、中でも最も顕著なものは国外での冷戦と国内での反共産主義に関連する争点であるが、それらに対してニューヨーク知識人は、当時彼らを著名にするのを助け、また今日に至るまで論争を巻き起こし続けてきた一連の意見と立場とをすでに準備していた。同様にして彼らはまた、相変わらずヨーロッパの思想の流れに鋭い関心を持ち続けると同時に、新しいアメリカの文筆家世代を後押しし、アメリカ文化にも良い点を見出すことにやぶさかではなかった。政治においても文化においても、ニュー Yorker たちは必ずしも団結していなかったし、団結の習慣もなかった。1950年代初頭の分裂は、多くの場合に、永続的なものであることが判明している。だが概して言えば、

『パーティザン・レビュー』グループを構成した知識人たちは、経験を共有したという意識を持ち、幅広い一組の社会的、文化的な価値に対する共通の忠誠心を抱き（必ずしもそうした価値を共通して適応したわけではないが）、またお互いの考えや意見に対する鋭敏な感受性を持って、第二次大戦後の時代に入った。戦後10年間を悩ませることになる問題の多くは、実際には、30年代末に生じていた。そしてニューヨーク知識人の多くは、彼らがすでに出しておいた解答以外の解答には、ほとんど我慢ができないことが明らかになった。ある特定の基本的な争点に関して、彼らの心はすでに決まっていた。ニューヨーク知識人の形成期は1945年以前に訪れていた。そこでこの研究が注意を向けるのは、この時期なのである。

いくつかのテーマが本書で提示される解釈に繰り返し出てくる。恐らく最も基本的なテーマは、『パーティザン・レビュー』グループのメンバーが、各自の成長のごく初期の段階から、いわゆるコスモポリタニズム的とも呼べる価値に対する傾倒を示したという論点である。こうした価値やその実際の意味に関する詳細な議論は、テキスト本文のしかるべきところで述べられるが、二、三の一般的な論評が必要である。幅広い見方からすると、コスモポリタニズムは個人的な事柄と公の事柄の双方に適用される理想を育て上げ、さまざまな知的、文化的、政治的な問題に対して、少なくとも一条の洞察の光を投げかけた。コスモポリタニズム的な価値は、国籍、人種、宗教、あるいは哲学などの個別主義への抵抗を要求すると同時に、豊かさ、複雑さ、多様性をほめたたえた。この理想の中心には、広い心で努力する精神——多様性や変化を受け入れる心の広さと、世界のより十分な理解と、より高度で、より包括的な表現手段を求める努力——があった。コスモポリタニズムは本来、独断的主張には懐疑的で、文化の可能性を狭めることには直ちに激しい反撃を加えた。『パーティザン・レビュー』グループのメンバーだけが、コスモポリタニズムの理想を抱

いた唯一のアメリカの知識人だったわけでは決していないが、特に本研究の対象となっている時期では、彼らがその主な信条のいくつかを、最も声高に、効果的に擁護したものの一員となった。『パーティザン・レビュー』誌は一般的なコスモポリタニズムの見方に、それ自身の特別な関心事を付け加え、編集陣はその結果生まれたパッケージから、時代の動きを判断する基準を作り上げた。こうして表現された価値や推定により、これまで通例認められてきた以上の首尾一貫した展望が、この雑誌とグループとに与えられた。

コスモポリタニズム的な価値に注意を向けると、いくつかの点でニューヨーク知識人たちの初期の経歴を理解する上で役に立つことがある。『パーティザン・レビュー』グループを形成した人々の中で明確な多数派は、東ヨーロッパのユダヤ系移民の子どもであるが、二、三の例では、彼ら自身が子どもの頃に移住してきていた。彼らの経歴から、第二世代のユダヤ人がアメリカの知的な生活に参加するという物語が、一つのテーマとして提示される。学者たちは『パーティザン・レビュー』誌におけるユダヤ人の数の優位に、それぞれ違う戦略や解釈で応じてきた。『文筆家とパーティザン』の中で、ギルバートはこのアイデンティティと経験の全領域を、可能な場合にはいつでも、それを無視することで処理した。これとは対照的に、熱狂的な文学理論家グラント・ウェブスターは、その著書『文学の共和国』の中で、「遺伝的には」彼らは「ほんの部分的にユダヤ系であるか、あるいはユダヤ系であるかも疑わしい」し、ユダヤ人らしさなど彼らの批評行為には全く重要ではないと主張するために、決まってニューヨーク知識人グループの民族構成を論じた。ウェブスターとは全く異なる問題に目を向けた社会学者のステイブン・A・ロングスタッフは、普遍主義と個別主義との緊張をニューヨーク知識人に関する自らの研究の中心と見なし、そうすることでユダヤ人のアイデンティティの問題を論じた⁽⁶⁾。本書で示される

議論は、ユダヤ人らしさが『パーティザン・レビュー』グループのメンバーにとって中心的な決定要因でもなければ、彼らと無関係のものでもない、と主張することになるだろう。ユダヤ人である人々のユダヤ人らしさに対する態度は、彼らが抱いていたコスモポリタニズム的な見解の表明として、最もよく理解できる。

コスモポリタニズム的な見方の心臓部にある幅広い包含する文化という理想が、ニューヨーク知識人の初期の歴史を通じて、彼らの見解や野心を形作った。全体としての西欧文化が、『パーティザン・レビュー』グループに最も一般的な準拠枠を提供し、また向上心の最も広い基準を提供した。つまり彼らの見方は、意識的に、断固として、国際的であった。これに注目して、一部の解説者は、このグループは気質の点で「ヨーロッパ的だ」と決めつける十分な根拠を見出し、アメリカ文化からのある種の居心地の悪い隔たりを示唆した。こうした評価は、初期『パーティザン・レビュー』誌の周辺にいた人々が、如何に激しく自分たちのエネルギーや感情を「アメリカの」生活や文学の特質をめぐる闘いに注ぎ込んでいたか、また彼らの国際意識がどれほど密接に国民的な希望と結び付いていたかを認識しそこなっている。

本研究では、ニューヨーク知識人の成長に関する重要なテーマとして、ヨーロッパの伝統に引けをとらないほど豊かで、包括的なアメリカ文化——そして特にアメリカ文学——に対する彼らの執拗な要求と、またその将来性を見出したいという彼らの熱意を強調することになるであろう。芸術と思想の領域で、アメリカの地方的な役割を終わらせようとする努力は、少なくとも19世紀の後半にまでさかのぼるが、『パーティザン・レビュー』誌が依拠した伝統は1910年代にすでに具体的な形を取っていた。ランドルフ・ボーンの「国境を越えたアメリカ」を求める呼び声は、文化の活力と多様性の見込みだけでなく、国民的伝統の形成過程で新しいグループの参加に道を開いたことで、第二世代の知識人にアピールできるコスモポリタニズム

の理想に勢いを与えた。ヴァン・ワイク・ブルックスのアメリカ文学の「成人化」を求める熱情は、世界のどんな文化にも匹敵する成熟した、洗練されたアメリカ文化というゴールを掲げていた——それは表に出てきた将来の可能性が、自分たち自身の経歴と平行して走っているのを目撃した若い文筆家たちをじらすこともあるゴールであった。この将来を約束された文化の中では、ちょうど知識人のアイデンティティが（ユダヤ的であろうとなかろうと）明瞭であると同時に、広範囲にわたって人間的でもありえたように、文筆家の声もアメリカ的であると同時に、国際的でもありえたのだ。彼ら独自のコスモポリタニズム的な見方の理解の仕方によって、ニューヨーク知識人たちは、私的世界と公的世界をつなぐ環、自分の自己意識と幅広い文化目標や参加の意識とをつなぐ環を提供されたのである。

『パーティザン・レビュー』グループをめぐるこの論究はまた、コスモポリタニズムの価値が、このグループに特徴的な政治的移行、30年代のラディカリズムから1940年代後半までに起こった冷戦期のリベラリズムへの政治的移行に、大きな影響を及ぼしたことも論ずることになる。読者の中には、この時期に左翼陣営から離れた知識人のことに触れると、突然の転向のイメージ、実質的に一晩で戦闘的な反共産主義者に、マルクス主義への攻撃的な批判者に変わった元ラディカルのイメージを呼び起こす人もいるであろう。そういうものも数名いたし、『パーティザン・レビュー』グループと関係のあったものも二名いた。彼らの変身は、実際に急激でもあり、極端でもあった。だがこの雑誌に関係した大半の人間は、この道をもっと緩やかに進んで行き、皆がみな同じ速度で進んでいたわけでもなければ、そのルートや目的地について意見の一致を見たわけでもなかった。ニューヨーク知識人グループの何人かは、また『パーティザン・レビュー』誌自体は、より本物のラディカリズムという名の下で、最初にスターリニズム版の共産主義から離反し、その後

で、明らかに左翼的であるどんな政治的な立場からも不規則に離脱していった。ほんの数名のものが大戦後の時代にも、ラディカルな見方を持ち続けた。また他の数名のものは、まず第一に、それほど真剣なラディカルであったわけでもなかった。1940年代に至るニューヨーク知識人をたどる歴史では、大半の例において、重要な政治的变化を認めねばならないし、同様に、個々人の経験の多様性と不規則性を認識しなければならない。それにもかかわらず、『パーティザン・レビュー』グループに属したもののたちの間では、彼らの経験のいくつかの局面を結び付け、また彼らの進路に論理を与えるのに役立つ、見解の凝集性と基底にある価値の連続性があった。

『パーティザン・レビュー』グループと密接に結びついたコスモポリタニズムの価値と文学観が、初期『パーティザン・レビュー』誌のラディカルな希望を活気づけた。そしてその同じ価値が、雑誌を支配する編集陣を共産党と断絶する方向に導いていった。コスモポリタニズムは、一連の態度、関係、考え方——反スターリニズムという否定的な結束力と協同して機能する肯定的な魅力の源泉——を提供したが、それらが1937年に世に出てきたニューヨークのグループを一つにまとめる上で役立った。後に第二次世界大戦によりもたらされた緊迫状態の中で、コスモポリタニズムの価値は再び、不満や正当化の枠組みを与え、また非難や賞賛を判断する基本的な一組の基準を与えた。『パーティザン・レビュー』グループ内での価値の連続性が本質的な生地を作り上げ、一方で、政治的なねじれや独特の方向転換という明るい色合いが劇的なデザインを供給した。

これからの議論は、単一の歴史の説明の仕方に基づくものではない。それは、思想は自律的に発展すると決めてかかるのでもなく、また思想は単にその社会的、経済的な環境を反映するだけだという前提に立つのでもなく、他にはない理解の小径を探るのである。この議論は『パーティザン・レビュー』誌の周辺にいた男

女を、彼ら自身の一部分に過ぎないものに変えてしまうことを避けようとする。とはいえこの議論は、彼らの職業的な生活を第一義的に重視するが、個人的な生活を重視するものではない（個人的な生活について、時に人はあまりにも多くのことを知りすぎてしまう場合がある）。本研究のテーマは、20世紀の合衆国の歴史に対してかなりの重要性を持つ経験やジレンマにも軽く触れているが、忘れずに、もっと特定の人間の物語も同様に語ることになる企てである。

『サイラス・ラパムの出世』(*The Rise of Silas Lapham*) や『デーヴィッド・レヴィンスキーの出世』(*The Rise of David Levinsky*) のようなアメリカ文学の作品において、成功は、それがふつう理解されているように、代償を支払わずには生まれてこないことを、我われは思い起こす。この研究のタイトル(*The Rise of the New York Intellectuals*) は、わが国の伝統の中にあるそうした声に敬意を表するものである。それは『パーティザン・レビュー』誌の成功とニューヨーク知識人の成功を承認するものであり、また同時に、先駆者たちにも触れることで、アメリカにおける政治的、社会的、そして知的な選択が引き続き複雑であることを示唆しようとするものである。

(続く)

序章の註

- (1) Melvin Maddocks, "Field Trips Among the Intellectuals," *Sewanee Review*, 90 (1982), 570.
- (2) 社会学者の Charles Kadushin は、知識人サークルの第一の明らかな特徴は、彼らには「明白な境界線はなく、中央と周辺を分割する線はしばしば勝手気ままに引かれている」ことに注目している。Kadushin はまた、回想や記憶の中では事実であると主張されていることに対する警告として有効に働くに違いない文章の中で、「境界線が特に明瞭というわけではなく、またサークルのそれぞれの成員が自分の周りの身近な関係しか『見る』ことができないので、サークルから『世の中に出た人たち』は、しばしば自分たちのサークルがどんな風に見えるのか、完全に間違っているというわけではないが、曖昧な考えしか持てないという」と付け加えている。"Networks and Circles in

- the Production of Culture,” *American Behavioral Scientist*, 19 (1976), 770-771.
- (3) James Burkhart Gilbert, *Writers and Partisans: A History of Literary Radicalism in America* (New York, 1968).
- (4) 回想文学や自伝文学に入る主要な寄稿作品の一覧表には、少なくとも以下の作品が含まれるであろう。Norman Podhoretz, *Making It* (New York, 1967); Alfred Kazin, *A Walker in the City* (New York, 1951), *Starting Out in the Thirties* (Boston, 1965), and *New York Jew* (New York, 1978); William Barrett, *The Truants: Adventures Among the Intellectuals* (Garden City, N.Y., 1982); William Phillips, *A Partisan View: Five Decades of the Literary Life* (Briarcliff Manor, N.Y. 1983); Sidney Hook の刊行予定の回想録, そのうちの一部が⁵ “The Radical Comedians: Inside *Partisan Review*,” として *American Scholar*, 54 (1984-85), 45-61 に掲載されている。そしてやや異なる傾向の作品ではあるが, Lionel Abel, *The Intellectual Follies: A Memoir of the Literary Venture in New York and Paris* (New York, 1984); Irving Howe, *A Margin of Hope: An intellectual Autobiography* (New York, 1982) など。このほか、思い出や回想
- の中のたくさんの冒険的な企てが、小作品、エッセイ、本の一部として発表されている。本研究に直接関係のあるものは、註のいろいろな箇所引用されている。
- (5) *Anti-Intellectualism in American Life* (New York, 1963), 394.
- (6) Grant Webster, *The Republic of Letters: A History of Postwar American Literary Opinion* (Baltimore, 1979), 210; Stephen A. Longstaff, “The New York Intellectuals: A Study of Particularism and Universalism in American High Culture” (Ph. D. Dissertation, University of California, Berkeley, 1978).

*原著は Terry A. Cooney, *The Rise of the New York Intellectuals: Partisan Review and Its Circle* (The University of Wisconsin Press, Wisconsin, 1986) である。全10章のうち、今後、「ニューヨーク知識人とアメリカ文学」に関する部分を抜粋して翻訳する予定である。